

試験終りて休暇となれば朝よりの外出校門の出  
入絶ゆることなく手に手に携へ来るは皆郷里へ  
の苞なり。吾はかゝるものを購ひ來りぬと示せ  
は余はそれにもまさるものを求めつと互に出し  
あふもをかし。あゝこの品々行李の中より取り  
出でて父母にさげ弟妹にあたへて喜ばるゝ時  
のうれしさ目のあたりなる心地してその夜はま  
つ夢に見るらむいと樂し。

幾百里の汽車の旅、車内の人々老いたる若き何  
れにつけても家庭の人々と比へ見ては想像をめ  
くらし窓外の景色千變萬化山來り谷むかへ畑さ  
り川過き或は稻田に青々たるけしき草苺る童馬  
追ふ男等目にふるゝものは皆明日見む故郷をし  
のぶべき種とならぬはなし。汽車を下りて車を  
かり我が村に近づけは逢ふ人毎にうちゑまひ會  
釋するも何となく心地よし門邊に迎ふる弟妹の  
姿見えそめしほどのうれしさはた戸口にむかへ  
て無事を祝ひたまふ父母の一言實に如何なるよ  
ろこびもこれには若かざるべし。  
かくて千里の山川へだてて遙かにしたひまつり

し父母に朝夕つかへまつりて其の暖き情に接し  
愛らしき弟妹と起居をともにしうちかたらしひ或  
は離れたちて小川のほとりにそゞろあるきし或  
は公園に遊びて都の上野日比谷等のさまをかた  
るも實に心ゆくかぎりなり。  
あゝわれら常に寄宿舎にあり屑々として餘裕な  
き身のたまたま廣き野原の景色を見渡し靜なる  
山水の間遊びては自ら氣ものごかに心もゆた  
かになりぬるをおぼゆまして家庭團樂の樂にい  
たりては何ものかこれに比するを得む。

●鴉片戰爭

文科四年 山川はつの

弱之肉強之食とこれ古今一轍なり唯、古に於て  
は多くは暴力に訴へ今に於ては術計に依ると多  
きのみ而して吾人は常に之を個人の間にかける  
よりも更に世界列國の國交的關係に於てその最  
甚しきを視る十八世紀の初めより英國は印度を  
蠶食し次いで緬甸を領し更に東進してその勢力  
を支那に伸ばさむとせり抑、支那と英國との交通

は十七世紀の初めにありて其の後時には中絶し  
時には厦門に於て貿易せしかど微々たるものな  
りき然るに西曆一千六百八十五年廣東を以て互  
市場と定むるに及び頻りに印度の鴉片輸入其隆  
盛なると遠く他を凌駕せり今鴉片輸入の沿革を  
たづぬるに其の最初は九世紀の始め唐の中葉に  
當りてアラビア人罌粟を支那に輸入せしか十五  
世紀の末に至りては葡萄牙人之をアラビアより  
支那に轉賣せり明末に至り會、煙草吸用禁止令  
の發布あり是に於て鴉片吸用の惡風生し清初に  
及びて漸く盛となりぬ雍正乾隆之際屢、之を禁  
せしかど尙止まず英人の印度を奪ひ東印度會社  
其の商權を掌握するに及び鴉片の輸入益、盛と  
なり禁令其の効なしかくて清國の生民鴉片吸用  
の爲に漸く懶惰に陥り賤貨の濫出頗る多きに至  
りぬ此の時に當りて林則徐といふ者之を憂ひて  
上奏するところあり因りて清帝則徐をして兩廣  
總督たらしむ則徐乃ち命を奉し直ちに禁令を諸  
外商に布き廣東の英人をして其の所有の鴉片を  
出さしめその三千餘函を燒却し且つ英國商人の

貿易を禁し以て弊害の根柢を絶たんとせり英國  
これ聞きて大に憤り遂に開戦を布告しゴルドン  
ブレールを指揮官とし大に舟師を發して澳門  
に入寇せり是實に千八百四十年六月也かくて舟  
山島を占領し轉して乍浦を攻め寧波を侵す而し  
て別將エリオットは直ちに渤海に入り白河に進  
み直隸巡撫に會見して國書の傳達を求めたり是  
に於て清帝は罪を則徐に歸してその職を奪ひ琦  
善を以て欽差大臣として廣東に於て和を議せし  
めたり事未だ決せざるに翌年二月戰端復開け英  
軍廣東を侵し北上して香港厦門を攻撃し定海鎮  
海寧波を略し更に後繼軍と合して六月遂に上海  
を陥れぬ清國水師提督陳化成勇戦して之に死す  
軍進みて鎮江を奪ひ更に長江を溯り八月全軍南  
京府外に著しぬ是に於て清廷大に震駭し著英伊  
里布を派して英國全權公使ポッチンジャーと南京  
に會して和を議せしめぬ曰く一、清國政府は軍  
費及び鴉片燒棄の賠償として金二千一百万兩を  
出し二、廣東厦門間福州寧波上海の五港を開き  
英國國民の通商竝に居住を許し猥りに關稅を課せ

ざるべし三、香港の主權を讓與すべしと實に一千八百四十二年八月二十九日なり蓋此の役たるや英國の對清策の無道なりし事は掩ふべからず故に其の初めにあたりては英國は力めて平穩主義をとりされど當時英國政府は切りに勢力を東洋に擴張せむとつめしかば事破裂するに及びては遂に清國の死命を制せむとするに至れり然るに清朝にては上下太平に狂れ兵器戦法は尙舊態を脱せず唯中華の龐大を誇りて世界の趨勢に通せず遂に強英のために蹂躪せらるるの悲運に會しぬされど此戦争によりて清國は百年迷夢を覺醒し世界の大勢に着眼するに至り西歐の文化を輸入して將に國運を開かんとする有様となりたるを思へばこの役亦清國の爲に多少の益なきにあらざるなり。

◎卒業式の日在校の或る友に

華やかな榮光が我が身の上に投げかけられて居ります。その華やかな光の中に立つて私は如何に客觀から眺められて居りませうか、私の主觀は一面に輝かしい心持をたへながら一面にはふと考へられる思を消し得ませぬ。しかし考へら

れる思、消し得ぬ想。それはもう明日からの我れの全局を占むべきものではございませぬ。私は公の務につくすべき人となりました。大人の境遇に於いて、反省少く公直に職務を盡し、研究もして行かればなりませぬ。たゞ表の公直な生活をきすつけぬ限りは、裏の私生活も我が心身の全局を支配するものであつて欲しいと望んで居ります。しかし世間的に健全な世渡りを致します間には、これはよほど操志が堅固で、その上敏捷な才能を有するのでなくてはできませんと存じます。

さにかく思想生活の第二期におゝて此の學校生活を終ります。心中に刻まれた消し得ぬ清い影。幸多き思ひ出、まことに嬉しうあつた過ぎし日のやうに圓滿な調和ある生命の裡に我を見出でて生きて参りますことは、日常の生活に之を追ひ之を求むべきものではございませぬ。日常の生活は風荒び雨職ぐ荒れの日にな、かふ心。さもなくとも花園に耕す心持で、生き／＼と思はずに働いて行かすばならぬでせう。そして求めないで行く月日の間に、清き思、純なる心からの「よき生活」を娛しむ折は、ふと興へられるでございませう。求むる心」ばすべて底には強烈でも、表面の心情は淡くなくてはいけません。櫻の花が咲きました。今朝の檜の姿。下向いてふつくりふくらむ蕾のさうしてあくあはれげに見られるのでせう。今夜の檜の風情、私は幾里の彼方にこれな想ひ見るでございませう。御機嫌よう。(野薔薇)

短歌

◎旅の歌の中に

柴舟

あしびなど媚ぶるがごとくほのにはふかすがの森の春のゆふぐれ  
 猿澤の池のさゝ波さゝれ波うたてもいとやはなやかにして  
 春の雲うす紫のかげを投ぐわかくさ山のゆるぎなだれに  
 あすといふ日のかさならばなごおもひ心かなしぶ奈良のふるさと  
 古き國われあたらしく迷へどもこゝにとまれといふ人もなし  
 かすが山杉のこかげにわが涙さをひて白く咲くあしびかな  
 つちはしの柱にかゝるあたらしき塵も悲しき佐保のふるかは  
 あすか川蟹のあななごつぶく／＼と見ゆるきのふの岸ひたしゆく  
 日の入りて空の青きが悲しさにおりむともせぬわか／＼のやま  
 かすが山藤のうら葉の春風にそよぐを見れば旅心地する  
 生駒などながば消えたる紫の霞の下の喜光寺の屋根